

やまがら

父（1930年代生まれ、故人）が、予言や超能力、未確認飛行物体に関心を持っていたことに感化され、私自身もオカルトチックなものに興味を持っていた。ユリ・ゲラー（1946-）の呼びかけに応じて、スプーンが曲がるように、テレビ画面に真剣に念を送っていた。小学校か中学校の図書館に、『ムー』という雑誌も置いてあり、最初は書かれている内容を100%信じていた。もちろん、ノストラダムス（1503-1566）の大予言にもはまつた¹⁾。中でも、「1999年7月に空から恐怖の大王が降ってくる」という予言は衝撃的だった。テレビも、ソ連の崩壊やゴルバチョフの失脚も「血の染みのある顔の男が……木星が獅子座にあるときに……死に体にな

る」などと伝え、大予言が的中した可能性を紹介していた。

1999年には、人工衛星が突如落ちてくると

か、何かが起きるだろうと、真剣に考えていた。誰も言わないうが、（私やちびまる子ちゃんのように）それなりの割合の人々が、少なからず信じていたはずだ。しかし、現実には、1999年7月、空から恐怖の大王は降ってこなかつた……。心の中の少しだけ信じていたものが瓦解し、予言とは妄言であることを確信した瞬間だった。さらに四半世紀が過ぎた。インターネットが普及し、人々は予言や妄言に振り回されなくなったかというと……、年々ひどくなっている。SNSの普及によって、自分自身が関心のある情報しか入手しない人々が増えてきたからだ。あいかわらず生成系AIも平気でうそをつくし、架空の映像も作ってしまう。こうした技術を巧みに利用して、為政者も、妄言を吹聴する傾向が強まる。「私が大統領になれば、24時間でロシアとウクライナの戦争を終わらせる」と言って、大統領となったドナルド・トランプ。一向に終結しない状況の中で、（戦争終について）「私が冗談で言っていたこ

とはみんな知っている」と嘯く状況だ。「不法移民に乗っ取られた町がある」という妄言などを発信し、移民の強制送還を進めている。ハーバード大学では、「2+2が分からずの学生が通っている」そうだ。経済面においても、自由貿易体制を率先して推進（強要）してきた米国だったが、トランプ第二次政権では、高関税をかけ、世界経済の混乱を引き起こし続けている。米国の信頼が失われ、米株安、米国債安、米ドル安のトリプル安の懸念が高まると、トランプ関税（10%を超える部分）の適用を90日間停止する混乱ぶり。高関税政策が維持されれば、米国内の物価高騰は確実であり、困窮することが確実であるにもかかわらず、42%の国民はこの大統領を支持している。

……2101年の皆さんに伺います。22世紀になれば、独裁者を信じる人はいないですよね。まさか生成系AIが最終決定をするような愚かな状況にはなっていませんよね。地球温暖化はどうなっていますか。カーボンニュートラルな存在だったはずの森林ですが、いつのまにか、地球温暖化抑制の切り札の一つになっています。間伐や新植による二酸化炭素削減効果はどの程度ありましたか。排出権取引など市場メカニズムを用いた解決策は、CSR（22世紀には死語ですかね）以上に有効ですか。そもそも、化石燃料の使用量は減りましたかね。2025年と同様な状況が続いているようであれば、「科学技術が発達しても、人間の知性は全く変わっていない」ようですね。これが私からの予言になります。この予言が妄言となることを願います。

参考文献（架空の文献かもしれませんのでご確認ください）

1) 五島勉（1973）ノストラダムスの大予言。祥伝社

（元・民明書房社員）

22世紀に生きる人々に向けての予言・妄言